

思い出したか、911?

『September Rising』というCDがある (<http://www.septemberrising.org/jp/>)。2001年9月11日の米国同時多発テロの犠牲者とその遺族たちに捧げる目的で作られたものだ。このCDの売上げは、テロの発生現場に向かい命を落とした消防士たちの遺族に贈られることになっている。CDに参加しているのは、米国のみならず様々な国のアーティスト。日本からは、佐藤全太氏が「Voices in the Air」というインストゥルメンタル・ナンバーを寄せている。「September Rising」プロジェクトに参加することになった経緯や、自身の楽曲について、佐藤氏に聞いた。(K)



インタビューを受ける佐藤氏(左)



第2巻第4号
通巻第39号

— 9月11日のテロについては、どのように考えていますか?

佐藤 まず、その原因がテロであろうとなかろうと、人が死ぬということは悼むべきことだと思います。9月11日のテロについては、一般市民を殺傷することが、自分たちの正義につながるのだとテロの実行組織が考えているのなら、それは大きな間違いです。
(2面に続く)



発行所 □東京都杉並区成田東4丁目3番44号 □〒166-0004からす新聞本社

からすホームページ <http://www.go-karasu.com/> 投書・お問い合わせのE-mail : colors@go-karasu.com

今日の紙面から

— 二面(特別インタビュー)
チャリティCD制作に日本より唯一参加
三面(芸術面)
レイズギャラリー

四・五面(からすライブラリー)
本 『最新地産地図』
CD 『ザ・ガンマン...』
アート 『パウル・クレー展』

六・七面(文芸面)
マリコの庭

その四 『イロハモミジ』

人間が動物と決別したとされる条件の一つに道具の使用がある。実際のところ、猿の仲間には道具を使うものもいるわけで、この条件が適切か否かは不明であるが、今はそれを云々するつもりはない。

そもそも道具とは何なのだろうか。御存知のように辞書の類いの好きな私だが、考えてみると、一度も「道具」という語を引いたことがないような気がしてきた。早速、手近にあるいくつかの当たる。器具だの仏具だの武器だの方便だのと、私の予想をはるかに超えた、様々な説明がなされている。にもかかわらず、どうにもしっくりこない。私にとって道具とは、何よりも身体の延長・拡大の具であるように思えるからである。

例えば、今、私はインクを充填した万年筆を握り、紙に文字を書き連ねている。例えば、猫缶を買うために単車に乗る。例えば、肌寒いから上着をもう一枚身につける。例えば、宿替えにあたり大和屋さんに壁紙の貼り替えを相談する電話をかける。それぞれ、手の、脚の、皮膚の、そして、口と耳の延長だと言っていいたいだろう。このように、私たちは道具をそれと意識することなく日常的に駆使しているのである。

あなたから全ての道具を取り去ったとしたらどうだろう。それでも、あなたの生活は成り立つだろうか。全裸で野原の真ん中に、あるいは、山中

に、海の上にいる自分を想像してみたい。その状態で、なお、あなたはあなたたりえるだろうか。もちろん、あなたはそれでも同一のあなた自身であると主張するだろうし、事実、生物学的にはやはり同一のものだと言っていいたいだろう。

万年筆で紙に文字を書きつけて封筒に詰め、切手を貼って送り出せば、中野区や輪島市、さらには、ロンドンやニュー・ハンプシャーに住む人々に思いを伝えることが可能である。わが家で演奏したデータをインターネットでアメリカに送り、一枚のアルバムとして完成させることだって。

歩いたら何時間かかるかわからぬ道程も、二輪や四輪の、発動機を有する乗り物を使えば、はるかに短い時間で到達可能である。飛行機を使えば、徒歩では永遠に辿り着けるはずのないところへだって。

私たちは何万年か前に洞窟に描かれた絵を見ることができるとし、何万年後かの人々が私たちの書き記すものを見ることがありえる話である。所謂タイムマシンという乗り物はまだ発明されないようだが、日記というささやかな行為によって、過去の自分と未来の自分との間に何らかの出会いを持つことは不可能ではない。

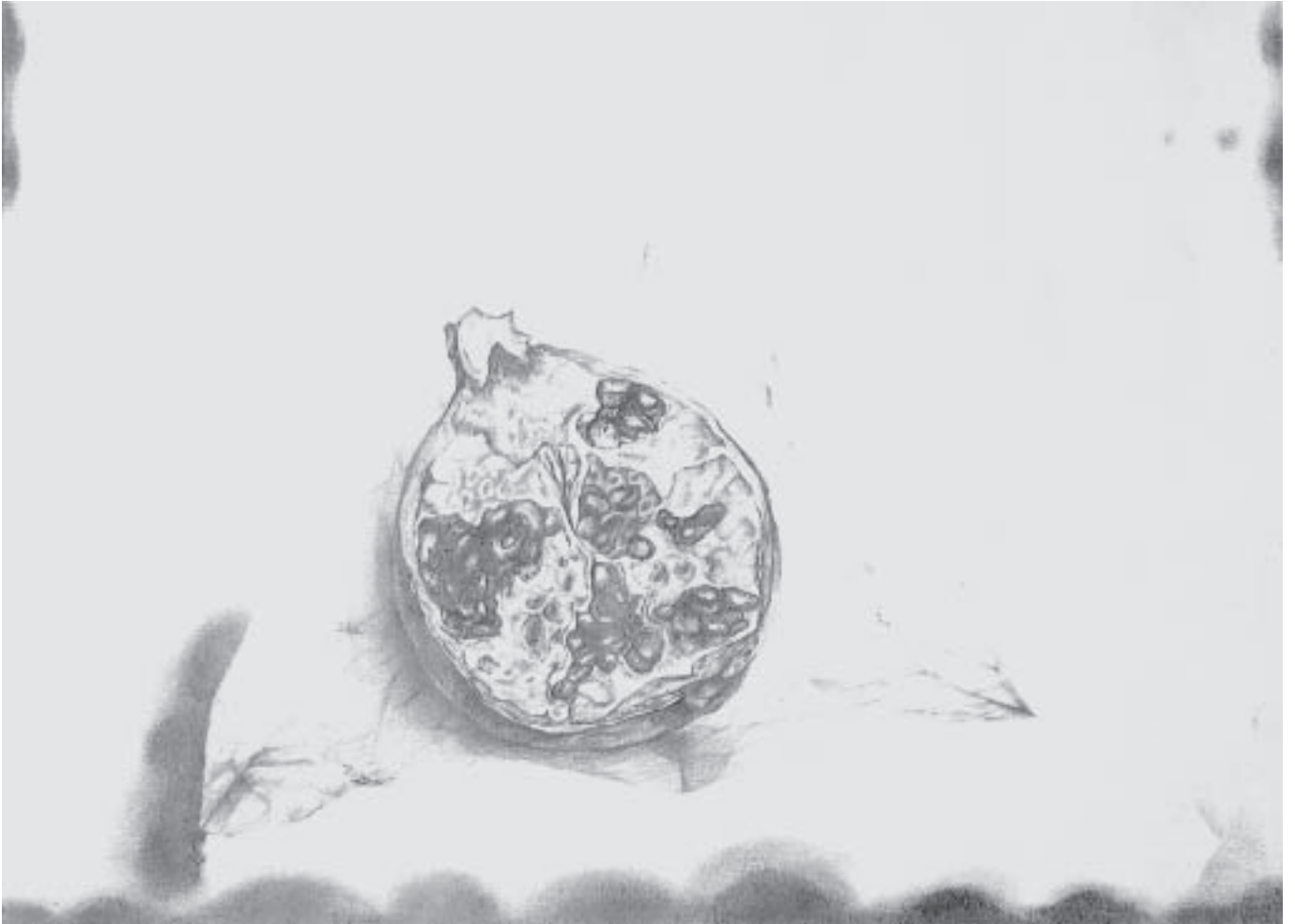
このようなことは、すべて、道具があつてこそである。

(最終面に続く)

からす新聞は××××が母体となつて、世界に文化と芸術を発信すべく発行しています。

誰でも自由に参加できません(無茶じゃない範囲で)。

Rei's Gallery



「ザクロ」

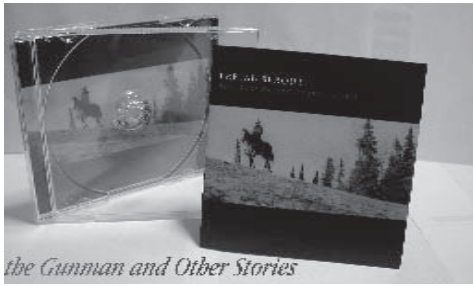
春は鼻と胸の奥がツーンとして喉の奥が酸っぱくなる。花粉のせい？花粉症になるずっと前から、小学校入学の四月から毎年春にこの感じは、訪れる。プチッと胸の中から、寂びしさや、緊張や、期待の感情の粒がつぶれて、それが鼻と喉に酸味を送り込む。すると自然と涙が出そうになって、恥ずかしいからグツと堪えるとスッパイ味がする。と言う訳で、酸っぱい粒の集合体ザクロです。

『the Gunman and the Other Stories』

Prefab Sprout

EMI Brasil、2001年

7243 5 32613 2 0



ああ、イギリス的な美声だなあ、と感ぜさせる人々がいる。例えば、デイヴィッド・シルヴィアン、例えば、デイヴィッド・ボウイ、例えば、ブライアン・フェリー、例えば

ああ、イギリス的な美声だなあ、と感ぜさせる人々がいる。例えば、デイヴィッド・シルヴィアン、例えば、デイヴィッド・ボウイ、例えば、ブライアン・フェリー、例えば、八〇年代前半に、些かプログレッシヴな、同時に、些かニュー・ウェイヴな香りを漂わせて登場してきたときのインパクトはかなりのものであった。ざわざわと一部の好事家の間では騒がれたものである。しかしながら、ポップの王道を行くのもなく、かといって、屈折しきつていられるでもない、という微妙な味わいが災いしたのか、特別な評価を得られずにいた。年を経るごとに角が取れたというべきか、余計なものもなくなっていく、曲も演奏もどんどんストレートになってきている。おかげでますます声自体の響きの良さが際立ち、透明感漂う空間の広がり、ひねくれた音楽好みの私が憧れてしまうような、静かに美しい世界がここにある。

(全太)



かそんな言葉が口から零れ出した瞬間に、どんな作品との距離を近付かせてくれる。接近しやすい作品であるけれど、なかなか離れられないクレイの魅力は、クレイが作品にリアリティを持って接しているからだ。その痕跡が、鑑賞者に充分伝わりやすい展示であった。作品を創る者にクレイファンは多い。それは流行ではない新しさと、センスに憧れてしまうのだろう。私もクレイに憧れて、また絵が描きたくなった。

(山間玲)

『総合地歴新地図』

帝国書院 1996 (初版)

毎年改訂されています。

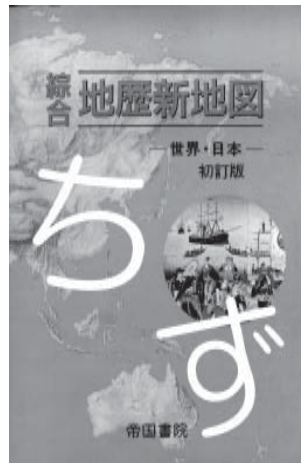
ISBN4-8071-5056-1



Books

旅は続く。再びミャンマーに戻ってダウエイという町があるのを発見する。あれ、そういう名前のイラン人のサッカー選手いたっけな、と思って今度はイランに飛ぶ。あいたく同名の町は見つからない。だいたい「ダウエイ

私は悲しくなるほど本を読むのが嫌いで、その代わりとしていつも傍らに置いていたのは地図である。一度も開かなかった日は記憶にない。地図上では勝手気ままな放浪ができる。この地図帳には歴史的視点が盛り込まれているのでさらに楽しい。たとえばミャンマーでスー・チー女史が解放されたというニュースを聞いて地図を開いてみると、首都のすぐ近くにかつて日本人町があったことがわかる。日本人町といえば山田長政だと思つて隣国タイに目を移すと、ああ、アユタヤつてのはここだったかとわかる。その方面に興味のある人は、ここを入りに書物を漁ってみるのもいいだろう。



「いつてどんな意味なんだ？ちよつとインターネットで検索掛けてみようかな。東の隣国はアフガニスタン。一時期毎日のようにその名を聞いたカンダハルは、アレクサンダー大王の建設した都市だったか。地図上には大王の進路が示されていて、矢印に沿って行くと、再びイランにシラーズという町を発見。シラヤマさんの娘は友だちからシラと呼ばれてるつて言つてたから、白山一家はシラーズだなあ、えつと春日部は、あれ、昔は粕壁つて言つたんだ。こんな調子で旅は果してしなく続く。(望月)

『パウル・クレー展』

Paul Klee and His Travels

1997年2月9日 3月31日、

神奈川県立近代美術館



私にとつて美術展の善し悪しは、鑑賞した後に絵が描きたくてたまらなくなるかどうかで決まる。描きたくなるということは、その作家に近付きたい欲求を持たせてくれる展示内容のことだ。このクレイ展は作家と鑑賞する側との距離が非常に密接だった。クレイの抽象表現は、鑑賞者の頭に？マークを浮かべさせて作品を理解させるのではなく、稚拙な表現かもしれないが、カワイイとかキレイと

明るい日本

ふとした事からロウソクを日本に送る事になったので、久しぶりにコベントガーデンに足を運んだ。どのくらいの種類のロウソクがあるのかは定かではなかったのだが、前に一度来たことがあるロウソク専門店に行った。日本でもお香など、アロマセラピー系の小物を置いてある店ではちよよくロウソクも見かけていたので、もしかしたらそのくらいの程度かもしれないと思っていたのだが、結構な種類があったので驚いた。もともとロウソクはヨーロッパの文化だろうし当然なのかもしれない。第一にこちらの人は明るい照明が何か嫌いなのだ。街角の街灯からも分かるように日本ではほとんどの街灯が白の蛍光灯(もしくはハロゲン。記憶による予想なので確かではないのだが)を使っているのに対して、こちらはほとんどが淡いオレンジ色の光のものを使っている。蛇足だが、こちらでは夜に駅や教会などの建築物をライトアップしている所が多く、この建築物用のライトは白が多いような気がする。しかし僕がロンドンで一番好きな建築物であるピックベン(国会議事堂)はオレンジ色に堂々と輝いているので、ライトアップするからにはそれぞれにどの色が一番似合うかぐらいは考えられているのだろう。もちろん建築様式、石造と木造などの違いはあるにせよ、街灯の色と建築物のライトアップ、この二つがヨーロッパの夜景を日本のそれよりも何となくロマンチックに見せる原因なのかもしれない。ちなみに話を元に戻すと、室内(人が住む空間としての)の照明に蛍光灯が使われている例はイギリスに来てから今までに見たことがない。ほとんどが白熱灯もしくは少し色の付いたハロゲンなのだ。日本人の友人の多くがイギリスに来てから目が悪くなったと言っている



のも、うなずける話である。そんな訳で今では、それほど日常的ではないにしろ、やっぱり生活の中でロウソクを使う機会はやはり日本人よりは多そう。さてこのロウソク、お目当ての品は蜂の巣のような文様のもので、蜂蜜か何やらも含まれている(らしい)もの。Bee Waxという名前であらうの板を丸めて円柱にしたロウソクだった。やっぱり売れ筋商品なのだろうか、他の物よりも少し値段が高いが店に入るといきなりBee Waxの棚が有りすく見つけられた。しかしこれだけ送るのも何か寂しいので、どうせなら色々送ってしまおうと探してみると実にスタンダードな白いロウソクだけでも色々ある。表面の質感が大理石のような感じで石



出来ているかのような物、ベットの匂い消しなのかベットに優しいのか Pet Remedyと名付けられたロウソク、多分煙の少ないロウソクなのだろう Smoke Eater など。臭い付きのものまで数えてしまおうとそれこそ収集が付かなくなってしまう。それぞれに形は色々有り、長細い教会などの燭台に立っている様なものや、普通のものよりも太めで、燭台なしで使える柱の様なロウソク、一番多いのはオセロの駒が大きくなったぐらいの平べったい丸い物だろう。柱ロウソクは Pillar Candle コーナーが有りそこに太さ長さが違う物が色々置いてあった。しかし一番解らないのは普通の白いロウソクだ。 Pillar Candle はその名の通り形から来る違いだと見ればあきらめが付くのだが、同じ形の白い長細いロウソクが何種類かあるのは何なのだろうか? それぞれに値段が少しずつ違うのだが、単に作っている所が違うのか、それぞれに臭いや煙、明るさ

などの特色があるのかいまいちはつきりしない。そんな中、一つだけ明らかに他とは違う白いロウソクがあった。普通のものよりも色がはつきりとした白色で硬い。叩いてみるとコツコツとはつきりした音がするのだ。これも材質の違いという明らかな違いはあるものの、自分で使ってみただけではないので他の事は、もうすでに包装紙で詰まらせてしまっているように、後で使ってみた感想を尋ねてみるしかないのだろう。



のものを除外してやっぱり白かクリーム色が主流なのだが、他に唯一赤があんまり種類はないものの普通のロウソクとして店に置かれていた。ただこの赤、どうしてもSMの二文字を連想させられてしまう。ロウソク屋さんのおしゃれな空間に真っ赤な長細いロウソクが束で置かれているのを見て、生々しい印象を受けてしまうのはやっぱり自分の心の問題なのだろうか。どうも奴等だけ浮いているような気がする。ついでなのでこれも買おうと思っただが、何となく気恥ずかしく手を取ることはなかった。要するに意識過剰なだけなのだろうが、中学生の頃の、いかがわしい本を本屋やコンビニで買おうとしてすぐ買いつらかった時のことを、何となく帰り道に思い出した。

(神山)



長井理佳

その四『イロハモミジ』

ある、秋の日のことです。マリコは縁がわの日なたに寝そべって、スーちゃんに手紙を書いていました。こういつ、何も用事のないお天気の日に、ゆっくりと手紙を書くのはなかなかいいものです。字も、いつもよりじょうずに書ける気がします。

そのとき、何かがそこにやってきた気がして、縁がわの外を見たマリコは、びっくりしました。ねことねずみが、ならんで座っているのです。

「マリコさんってのはあんたかい。」

ねこが口をひらきました。この辺で時々みかける、大きなぶちねこでした。「こわこわした毛に、がっちりした肩。片耳が折れているのは、けんかのくんしよつのようなです。こんな小さなねずみなんか、一口で食べてしまえるでしょつに、ならんでいるのはほんとうにぶしぎなけしぎでした。」

「キイチコのしげみでよくお茶の店をやっている黒猫が、あんなら信用できるっていつたから来たんだが。」

「その黒猫さんなら知ってる！最近会ってないけれど、元気がなあ。」

マリコがそつ言つた、ぶちねこは

「ああ、でも今日はそんなことじゃないんだ。あんたに相談があつてね。」

と、少しせかせかしたように言いました。

となりにいるねずみは、灰色のくくふつうのねずみでした。せいっぱい胸をはって立っていました。まあ、ひげもしっぽも、ぶるぶるふるえているのです。

「えらいわねえ。猫なのに、ねずみをつかまえないなんて！」

心の中で、

(もしもこのかわいそうなねずみに飛びかかったりしたら、すぐに止めなくっちゃ。)

と、考えながら、マリコは何でもないふうに言いました。

「それで、なんのじよつ？」

「じ、じつは、これなんです。」

ねずみは、細くまるめた紙をマリコにさししました。マリコが広げてみると、それは、一枚の地図でした。紙はだいたいたんでいて、あちこちしみがついています。そこに、よろよろしたへたくそな線で、家や木らしきものがいてあつて、その中の一かしょにx印がついています。

「このx印がどこだか、マリコさん、おしえてください。」

『たからののははしよははしよ』
きつとやくにたつてあつた
のちのよのね たちのために』

「じ、読めないけど。」

マリコは、ね たちのために の こと

ろを指さして言いました。そこに、大きなあながあいているのです。

「そつなんです。そこがもんだいなんです。」

ねずみがいいました。

「だからなあ、それは、もんだいなんかじゃないんだよ。ねこたちのために』に決まっていますじゃないか。」

「そんなはずはありません！その地図は、われらねずみたちの、とおりみちで発見されたものなんです。ねずみたちのために』にまちがいありません。」

「何を言つてやがる。ねずみのおりみちは、ねこのとおりみちさ。おれたちのたからを横どりしようつたつて、そうはいかないぜ。」

ぶちねこは、かぎのように曲つたしっぽをくいつとゆらして、鼻をならしました。

「横どりだつて！？そつちこそ、いつも、わたしたちの平和を横どりにしているくせに！」

ねずみは、こわいのも忘れて、思わずチューチューとちゅちゅなぶしをふりあげました。

「ぶちねこ！」

ぶちねこが、するどい爪のついた前足を、しゅつと上げそつになつたとき、マリコは、縁がわから飛び下りました。

「まつてよ。それなら、あたしもいつしよにたからものをさがす手伝いをしてあげる。開けてみればわかるかもしれないの。」

「じゃまをされたねこは、しばらく毛をさかだてていました。くやしききれにいいました。『今日のところは、このちびに免じてゆるしてやるが、もしも、たからがおれたちねこのものだつてことがはつきりしたら、おまえをすくにおのみこんでやるからな！』

「そのむつたつた！」

ねずみがマリコの靴のかげから言い返ししました。

「ちびとはなにチュー！」

マリコも思わず言いました。たとえ、たからものがねこたちのものでも、このねずみを食べさせられるわけには行きませぬ。

さて、地図をよーく見ると、ははーん、わか

りました。これは……。

「なーんだ。これ、うちの庭じゃないの。」

つまり、地図の中の家はマリコの住んでいる家。そのまわりが庭だつてことです。どうやら、地図はそんなに何百年も前のものではないようです。

「この大きいのがスズカケ。こつちの木はきつとあんずね。それから、そのとなりはヤエザクラ。で、この赤いx印の木は……。」

マリコは、地図をもつたまま庭を歩き出し、裏庭に行く、x印がどつして赤で書いてあるのか、すぐにわかりました。そして、その印は、じつはxなんかじゃなかつたんです。紙がくしゃくしゃだつたのでわかりませんでした。

「もみじの葉っぱさー！」

そう、xのように見えたのは、イロハモミジの葉っぱのかたぢだつたのです。そして、今や、秋の日ざしの中で、イロハモミジの木は、燃えるように赤く輝いていました。

「はー！」

ねこもねずみも、思わずためいきをつきました。

木はいつも、こつしていつの間にか変わっているのです。初夏には、小さなプロペラのような実をつけていた木です。上から落とすと、くるくる回りながら落ちるあれです。時々マリコは、ありやてんとう虫が、その小さなプロペラをあたまたまにつけて飛んでいるところを想像してみました。

「この木の根もとだーきつとそつただー！」

真つ赤なもみじの葉っぱをぶみながら、ねずみがさげびました。

「あたし、スニッソをもつてへぬ。」

ふりむいたマリコはびっくりしました。少しはなれたところに、一〇ぴきばかりのねこたちが、同じくらしい間をあけてすわつて、マリコたちをかこんでいるのです。

「ぎゃー……。」

ねずみがひめいを上げました。かわいそつに、腰をぬかしています。

「なあに、みんなだからものが見たくてやって来たのさ。こんなめでたいことはそんなにありやしない。「ちそうでも食べて祝つとするさ。」

「ぶちねこはにやりと笑って、ねずみをちらっと見ました。そのときです。」

「おおーい！ だいじょつぶか。助けに来たぞー！」

という声が出て、ばらばらと何かがぶつてきました。屋根の上から、なかまのねずみたちが顔を出して、いつせいにまめをなげているのです。

「みんなあ……。」

ねずみはなみだ声になりました。マリコはねこたちに、いいました。

「ちよつとーあたしの前でやばんなことをしたら、ゆるさないわよ。」

「はあーいほ。」

地面を掘るのは、たいへんでした。マリコはすっかり汗をかいてしまいました。それなのに、ねこたちときたら、あくびなんかしながら見ているのです。おまけに、一〇びきのうち、七ひきは寝ています。屋根の上のねずみたちが、

「マリコさん、しっかりー！」

と、応援してくれなかつたら、マリコはとくにほろり出していたでしょう。

「ほんとにここに……あるのかしら。誰かがいたずらで書いた地図じゃないのかしら。」

と、思い始めた時です。

かたつと音がして、スコップの先が何かに当たりました。そのとたん、居眠りしていたねこたちの耳がびくっとうごいて、

「あ。」

と、みんな立ち上がりました。まったく、すっかり眠りこけていたわけじゃないのです。

埋まっていたのは、ぼろぼろになった、木の箱でした。お田さまの下に引っ張り出すと、今

にもくずれそうに見えました。

「なんだかすいぶんきたないね。」

ねずみが、がっかりしたようにいいました。

「やったぞ、おれたちねこそくのだからだ。」

ぶちねこが、がりがりひっかきはじめました。

「するいぞ。」

「そつだそつだ。」

屋根の上から、ねずみたちがさけびました。でも、まちきれないねこたちは、もう箱をとりかこんでひっかいています。さつきまで眠そうだったのなんかうそのように、

目をらんらんと輝かせています。

「あ。」

「ぼかつと、ふたがあきました。」

ふわふわわーん

出て来たのは、まず、へんなけむりでした。

「なに、これ。」

ねずみが泣きそうな声でいきました。

中に入ったのは、金茶色の粉でした。細かい粉が、けむりのように立ちのぼったのです。

その時、遠くからざわざわと木々をゆらして、秋の風が吹いて来ました。

ど、ど、どーっ

風は、落ち葉も、箱の中の粉もみんな空へとまきちらしました。

「あーっ。」



マリコは、ねこたちのようすがおかしいのに気がつきました。

「みな、とろーんとした目になって、空中を見上げていっているのです。」

「おお、なんとういいういにおいだ。すばらしい。」

ぶちねこが目をにゅーつと細くしていいました。

「ほーんと。いやーなことも、こーう、ばあーつと忘れちゃうねえ。」

三毛ねこが、ぼわーんとした声でいいました。

ねこたちは、

「あつちにはらふら、こつちにはらふら、よつぱらつたように踊り出しました。一〇びきどころではありません。十二、十三……。」

「ねえ、これ、またたびよ、きつと。」

マリコは言いました。またたびは、ねこの大好きな植物です。具合が悪い時は、薬にもなるのだと、おばあちゃんに聞いたことがあります。

「またたびだつて！ じゃあ、だからものはねこのものだったんだ。」

ねずみは泣き出しました。

「せつだめだあ。ほく、のみこまれちまつ。」

けれど、ねこたちは今、それどころではないようでした。みんな、うっとりした目で、ころころ転がったり、おどりをおどったり、な

んだか笑いが止まらないのモイます。

「ねえ、見てよ。箱の中にまだ何かあるわ。」

粉の下に、布のふくろがうまつていました。たくさん金の鈴が入っています。ひとつひとつ、ひもがついています。

「これ、どうするのかしら……。」

そのときです。とつぜん、ねずみが飛び上がりました。

「うわーい。わかった！ わかったぞー！」

ねずみは、笑いながらおどりはじめました。とんぼがえりやちゅーがえりまではじめました。

「これは、ぼくらのだからだ！ ねずみのたからなんだー！」

マリコは何がなんだかわかりません。

「ねえ、どうしたの？ さっぱりわからないじゃないのよー。」

すると、ねずみがいいました。

「ねずみの会議のお話、知ってます？ ほら、ねこの首にだれが鈴をつけにいくのかつていうあれです。」

「あ、知ってる。インソップのお話でしょ。」

ねずみは、空に向かってさけびました。

「今だ。今こそ、そのときが来たんだー！」

「おーー！」

屋根の上から、いつせいにねずみたちが下りて来ました。そして、みんな、またたびにゅーぱらつてはらふらのねこたちの首に、金の鈴をかけはじめました。鈴は全部で一五ありました。それは、そこに来ていたねこたちの数と、ちよつとびつたりでした。

ど、ど、どーっ

また、風が吹いて来ました。青空に、イロハモミジの葉っぱがまいるがりました。

「あつは、きれいな葉っぱだあ。」

鈴をつけたねこたちは、きげんで笑っています。そのまわりでは、ねずみたちがうれしそうにおどりをおどっています。それはまるで、秋の庭のおまつりのようでした。

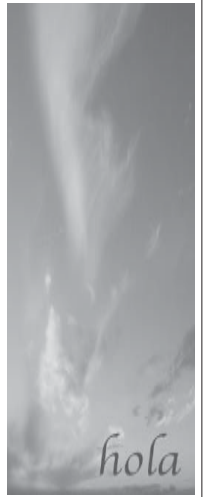
閑話休題 日本にて一

スペインのプロジェクトチームがやって来た。プロジェクトの打合せのためというよりは、友人らを伴って総勢七人の来日では、明らかにパカンスと言わざるをえない。本来なら、現地で密接に連絡をとりながら図面を詰めて行かなければならない時期なのに、東京では、皆、気を揉んでいたのだが、プロジェクトの締め切りは、スペインの時間ルールで何とかするという宣言のようだし、来てしまったからには仕方ない。図面を描き上げてしまいう前に、プロジェクトを生みだしつつある遠い異国のことを見聞したいという、見上げた心意気と考えたいものだが、彼らはオートマチックにやって来たのだ。もつとも、結果はそうようになったとしても、である。

他の仕事も山積していたのに、おかげでスペインのプロジェクト自体の密度ではなく、かれらとの関係を密にする十日間を過ごすことになった。それも大切なことではある。風景は東京なのに、まるでスペインにいるような錯覚にすら襲われた。なにして七対一である。

三日目に、彼らに携帯電話を渡した。失礼かもしれないが、持たせたという感覚でもある。今回は、そのような文明の利器にお世話にならずにすむかと期待したが儂かった。

初めて、来日した友人に、携帯電話を渡したのは二年前くらい前のことだったろうか。時間を節約できたり、連絡もなにかもスムーズにいった。まして、初めてやって来た彼らにとつて、異国での連絡は、面倒で時間をとられる。せつかく旅行に来ただから、普段の生活とは違う不便さの中に身を置いてもらおうかとも考えたが、結局、不便を被るなにかには、自分もいるのだとわかった。おおらかに構えていれば良いのだろうか、立場上そうもいかな



い。
我々の生活のリズムが、かつて、と言つても、ただか十年前と比べると、格段にならぬほど変化したということだ。便利になったということではある。連絡の煩わしさとひきかえに、もつとこの国をよく見て欲しいという気持ちもあつたが、もつとも、携帯電話を渡すこと自体、この国の状況を示すものかもしれない。

打合せやプロジェクトの進行や企画レベルの決まごすらも、計画的にコントロールされているというよりは、寧ろ行当りばつたりに進むよう感じていた。現地では、何が予定され何が変更されたのか、言語を理解しないので全ては解らず、漠然にアバウトだと思つていたが、今回よくわかった。

彼らの行動は、ずっと緩やかなのである。目標や予定は、ものごとの大きな方向を決めたということの意味で、決めた通りに進めるという約束をしたことにはならないのだ。おおざっぱに言えば、目標を達成するより、その過程のひとつひとつのことから最大の魅力を引きだそうとするのもいろいろだろうか。豊か、である。まるで、イタリアのフットボールに対して、スペインのフットボールが攻めて、華やかに敗れ去るのと同じようである。

そんな彼らにとつては、携帯電話のような道具があつて、生活の合理性と豊かさのバランスが、ちょうどよくとれるのかと思つてしまうほどである。だから、彼らが予定を変更しても、全然嫌みではないのだが、そこに第三者が含まれると厄介になる。それも、たとえば京都の料理屋だったりすると、こちらはおおいに気を揉むことになる。まして紹介を受けた有名な老舗だったりすると、最悪の気分である。

ぼくは、ひとり東京に残つたプロフェッサーアーキテクトとともに、その土曜日の夕方、京都に向かうことになつてた。彼は東京が気に入つて、ひとりで地下鉄に乗つてみたいし歩いてみたいから、出発までおまへは仕事をしたいと言つた。やつと訪れた貴重な時間、僕は、朝から事務所にきて準備をしていた。他の六人は、前日に東京を発ち、その日は一日奈良へ行くことになつてた。そして夕刻、京都で落ち合い、懐石を頂くことと予約をしていたのである。

携帯が鳴つた。彼らからだ。心なしか電波の状態が悪く騒々しい。どうやら電話は、岡山へ向かう新幹線の車中かららしい。どうなつていのかと、よく話を聴いて



みると、なんとともサムノグチの庭園美術館を訪れたくて、急に高松へゆくことにしたらしい。
四国の高松、牟礼にある、彫刻家サムノグチの生前のアトリエで、最近、庭園美術館として開放された。彼の創作にかける思いがそのまま伝わってくるような環境で、多くの作品に触れる

ことができる。以前より訪れてみたいと思つていたが、先を越された思いであつた。しかもこんな面倒とともに。今夜の予約を遅らせられないかということだが、彼らと行動を共にしていれば、はじめから最終の時間で頼んでおくのは道理である。いくら橋で繋がつたとは言つても、やはり高松はそれなりに遠かる。夕刻までに京都に帰つてこれるわけがない。

せつかくの朝だというのに。庭園美術館へ電話をし、まず開館日なのかどうかを確かめるところから始まり、しかじかことこの次第を説明し、なんとか着いたらすぐにツアーの時間を待たずに見せてもらえるように了解を得ることができた。次に京都に辿り着ける列車と乗り継ぎの時刻を確かめ、また美術館に、電車に間に合うよう車を呼んでもらうように頼み、そういうわけでよろしく願いますと、最後は彼らに、こういうことで、帰つてくれることになったから電車に乗り遅れないようにとすべての情報を伝達して、あとは運を天に任せたい気持ちだ。そして、彼らは帰つてきたのだが、最後にまた、やつてくれました。ふたり食事に来ないことにした、だつて。もう、急遽京都の友達を呼びだして、何とか人数を揃えることができました。やれやれ。

渡しておいた携帯電話のおかげで、事無きを得たのだろうか。それとも携帯電話があるからということでも楽天的な行動が助長されたのか。何れにしても彼らは高松に行ったのか。恐らく、公衆電話とのやりとりだったら、少なくともぼくは相当苛々したのだらうことだけは確かである、などと考へてしまつた。



What's money?

下町の玩具問屋に勤める人から聞いた話だ。お客さんにはアジアからのバイヤーがかなり多いという。ガンダムとかキティちゃんなど日本発のキャラクター商品がどこの国でも大人気なのだそう。なりふり構わぬ商魂たくましい彼らのこと、値切れるだけ値切るのは当たり前。運送費もバカにならないということで、ダンボールに巧みに寸分の隙間も残さず買った商品を詰め込むのだという。合言葉はこうだ。

Space is money.

「隙間はカネなり」

何でもお金に換算できるはずもないと言えそうだが、でもできるという人もいて、実際やってしまう。それを言いだせば何だってカネだ。

What's money?

「ちょっと電話かけてくる」

ラヴィーナはそう言ってTVルームを出ていった。

「イスラエルの首都エルサレムで、またしてもパレスチナ過激派による自爆テロが発生した模様。・・・」

ラヴィーナの実家はエルサレムの旧市街でパン屋を営んでいるのだった。残された僕とチユスはしばらく沈黙するしかなかった。チユスにしたって独裁者フランコの記憶は遠い平和スペインの一市民だった。

「おい、お前今晚サリーとデートか？」

「いや、あ、明日・・・あたりか・・・」

「だったらほれ、これ持ってけよ」

「あ・・・サ、サンキュー」

「常識だろ」

電話を終えて戻ってきたラヴィーナの気配に、僕は慌ててそのコンドームをポケットに押し込んだ。

「大丈夫だったみたい。でもほんとに困るのよね。こんなのが続いてちゃ、うちの商売上がったらだわ」

彼女は驚くほど平穏な様子でそう言った。

「ほんっともう“Security is money.”(『安全はカネなり』)よ」

どうやら切羽詰まった命の危険というのはあまりにも日常茶飯事だということらしい。怒りもある、憂いもある、ただ、

「そりゃあもちろん命あっての物種だけど、でも、とにかくお金がなくなっちゃ生きていけないでしょ」

いよいよワールドカップがやってくる。開催が近づくとつれヨーロッパ、特にイギリスからやって来るフリーガンたちの危険を煽る報道がか

なり目立つ。黒船到来のころから何にも日本人は変わっていない。

実際ふたを開けてみたらどうか。筋金入りのフリーガンなどほとんどやって来ないだろうし、大した騒乱にもならないと思う。もちろん事前策が功を奏するという部分も多かるが、それ以前にヨーロッパ人にとって日本はとにかく遠い国なのである。インターネットでいくら世界が小さくなったといっても、生身の移動は別。前回のフランスへは、バスを連ねてフェリーに乗って、その日のうちにスピーカーからイギリス国歌を流しながらの現地到着が可能だったが、日本は別。航空運賃はバカにならない。

All I need is money. [アライネズモニ]

「カネくれ」

ただし、これを機に小金を持った(溜め込んだ)若干の人たちが、鬼の居ぬ間にヴァイオレンス系イングランド代表デビューを虎視眈々と狙っているのかもしれない、やっぱり札幌でのアルゼンチン戦からは目が離せないと思う。

フランス大統領選では、一回目の投票でルペンなる人物が第二位となり、シラク現大統領との決戦投票に進んだ。本選では予想どおりの大差で破れた氏の最も目立つ主張は、「移民よ出ていけもう来るな」である。アラブ、アジアからの移民がわが国「本来」の国民(白人)から仕事を奪っている、治安を悪化させている、というのだ。奴等さえ居なくなれば安心して働ける社会が築ける。

Nationalism is money.

「民族主義がカネになるのだ」

そのルペン氏のお手本は日本だという。確かに一億二千万もの国民のほとんどが昔からの日本人である特徴は世界に類を見ない。入国管理は飛びきり厳しく、国籍の取得も簡単ではない日本は、世界トップクラスの移民排斥国家と言って差し支えないのかもしれない。例の商魂たくましいアジア商人たちも、空港で根掘り葉掘り聞かれ、時にはいわれのない不法就労の疑いをかけられることもあるという。最悪な時は、別室に連行されて無駄な時間を過ごさなければならないそうだ。「まったく

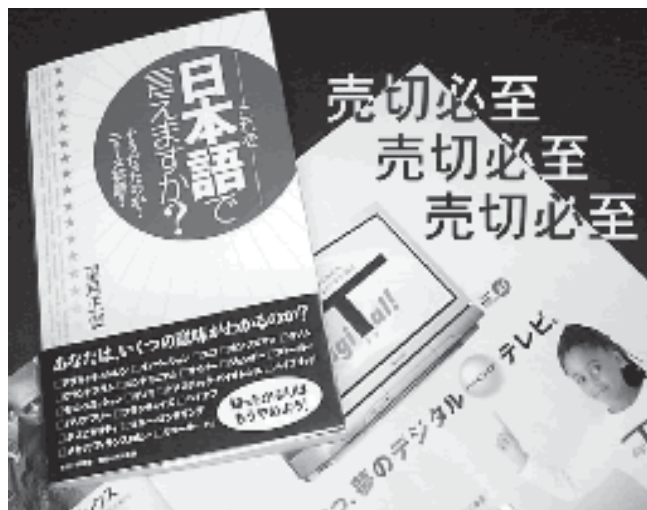
Time is money なのに・・・」

(望月)

All We Need Is Love



広告の掲載を希望する方は当社宣伝部まで。



私たちは道具に囲まれ、道具を駆使し、道具に依存し、生活している。道具は私たちの身体や精神を延長し、空間や時間を仮想的に押し曲げることを可能にする。道具をもつて私たちが手に入れるもの、つまり、それは「いま」や「ここ」を超越することである。生物としての私たちは、何をどうしても、今のところ、「いま」「ここ」にある存在以外ではありえない。にもかかわらず、私たちは道具を使用して、そこから飛び出してゆく。このことを、人間が他の動物と決を分かちつことになった革命的な前進だと考えることもできよう。その一方で、「いま」「ここ」だけで生きる動物なら持つはずのない、社会や精神の病のほとんどすべてを齎しているのである、とも考えられる。私たちが道具を駆使して身体や精神を延長することがなければ、過剰な欲望に起因する災いに苦しむことはないはずだろう。金銭や権力や宗教、愛情や関係に煩わされる猫、戦闘機に乗って

(二面から続く)

爆弾を落とす猫、あなたはそんなものを見たことがあるだろうか。

人間として、本質的には動物である。生まれてくるときには、小洒落たドレスを着ているわけでもないし、オートバイに乗っているわけでもない。ましてや、だるくなるほど重たい金無垢の腕時計などしているわけがない。さりながら、生まれたままの姿で何の道具も持たぬまま生きていけ、と言われたとしたら、それは限りなく不可能に近い、と答えるをえまい。

このことを踏まえて、たまには裸の自分を見つめる必要があるだろう。あらゆる道具を取り払った生物としての自分を。そこに見える自分は何ものか。

但し、勢い余って、裸の自分ではなく裸の他人を見つめてみようとするこのとき、くれぐれも注意していただきたい。その行為は意味が違って、軽犯罪法の処罰の対象となります。

(主太)



Ken-ichi Shinozaki, architect

4-3-44-1 Narita-higashi, Suginami-ku,
Tokyo 166-0015,
Voice : +81-3-3220-0644
Facsimile : +81-3-3220-0640;
e-mail: geta-s@t3.rim.or.jp

篠崎健一アトリエ

第2回じょじ伊東プロデュース公演

BABY, オンリー・ユー

ご来場いただきありがとうございます
ございました。

ご批判、ご批判、ご批判を

03-5497-4260

joji@kt.rim.or.jp

までぜひ。

dani

万年筆なら dani

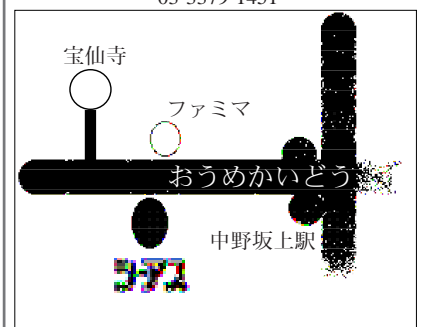
<http://danijapan.com/>

1クラス4人までの少人数制学習塾

ファミマ

中野区本町2-50-12 ドエル中野201号

03-3379-1451



編集後記
からす新聞第二巻第三号(通巻第三九号)、無事、発刊できました。
新聞に限らず、これからも新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いいたします。御意見・御要望をぜひお寄せ下さい。
次号発刊予定日は二〇〇二年四月二十五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。